

書 評

伊藤正子・吉井美知子編.『原発輸出の欺瞞—日本とベトナム,「友好」関係の舞台裏』明石書店,2015年,216p.

昼間 賢*

2011年3月11日に起こった東日本大震災と、それに続く東京電力福島第一原子力発電所の事故は、災害の直接の被害への対応課題に加えて、現代日本社会の根幹にかかわる、いやそのものといって差支えない重要問題を、日本国内のみならず、近隣諸国や関係する世界各国に対しても明らかにすることとなった。すなわち、先進的な産業構造を有する国々におけるエネルギー問題が、アメリカ合衆国の政治経済と連動した多国間かつ世界的な体制と多かれ少なかれ密接にかかわっている現実である。

本書の主題は、日本国からベトナム社会主義共和国への「原発輸出」である。近年の日越関係は、本格的な経済協力を軸に相互性を深めている。その延長上に、ベトナムが信頼を寄せる日本の技術、その最たるもののひとつである原子力発電の輸出が、公式には2010年10月から現実的に検討されてきた。発電所の予定地はベトナム中南部ニントゥアン省の海岸地帯で、計画上は「ニントゥアン第二原子力発電所」と呼ばれている。同地ではロシア主導の「ニントゥアン第一原子力発電所」の計画も進行している。

このプロジェクトの何が「欺瞞」なのか、これは、あれほどの被害を出し、今日も出し続けている事故の元凶を、事故の検証も原因の解明も十分なされていないうちから外国へ輸出することに他ならない。両国の間では、2012年1月に日越原子力協定が結ばれており、その面ではベトナム側の要請に応じる格好ではあるものの、後述のように、その必要の内実は十分明らかにはなっていない。事実、ベトナム政府は2014年秋に、第二発電所の建設計画を当座2020年まで延期することを決定、発表している、事態は流動的である。

このような状況下で出版された本書は、国内有数のベトナム研究者・専門家による事実にもとづいた分析と報告の集成である。ベトナムでは政治問題にかんする発言の自由が大きく制限されているため、ベトナムの関係者・識者の見解を加えた本書の出版は非常に有意義である。この問題の最初の当事者を代表するチャム人の作家インラサラの歴史的・文化的な展望に立った現状報告も、言語学者・元ベトナム国会議員のグエン・ミン・トゥエットのデータを駆使した客観的な考察と提言も、専門家たちの分析に確かなリアリティを与えている。編者をはじめ、執筆者や関係者各位の熱意と英断の賜物だろう。各章の論題と執筆者は以下のとおり。

- 第1章 ベトナムの原発輸出はどう推進されてきたのか 経済政策の目玉としての輸出戦略 (満田夏花)
コラム1 原発建設予定地の村を訪ねて

* 立教大学兼任講師

(中井信介)

第 2 章 原発輸出と日本政府 海外原発輸出に使われる国のお金 (田辺有輝)

コラム 2 チャム人と原発建設計画 (Inrasara)

第 3 章 ベトナムのエネルギー政策と原子力法 急増する電力需要への対応 (遠藤 聡)

第 4 章 大規模開発をめぐるガバナンスの諸問題 ボーキサイト開発の事例から原発計画を問う (中野亜里)

第 5 章 誰のための原発計画か その倫理性を問う (伊藤正子)

コラム 3 民族の生命を外国技術の賭けの対象にはできない (グエン・ミン・トゥエット)

第 6 章 差別構造を考える 私たちにできること (吉井美知子)

本稿では、重要と思われる 3 つの論点のために 3 つの問いを提起して、本書の内容をよりよく理解する運びとしたい。第一には、原発輸出とは実際にはどういうことなのか。第二には、原発だけが問題なのか。第三に、原発を介した日越協力の本当の狙いは何なのか。

まず、ベトナムでの原発建設に予想されている問題点を概観しておこう。本書では、第 1 章で計 9 項目が挙げられている。①地元社会に与える影響、②ウミガメ産卵地の国立公園に隣接、③施行・運用技術の問題 (ベトナムにおけるコンクリート施行リスクは日本の

4 倍以上との分析あり)、④汚職腐敗とガバナンスの欠如、⑤津波対策が不明確、⑥周辺人口の多さと避難計画の不確実性、⑦情報公開・市民参加の欠如、⑧不明確な使用済み燃料の処分方法、⑨周辺諸国の反対。これだけの問題点がありながら、ベトナムではこの計画の存在自体が国民には知らされておらず、第 5 章に記されているとおりに、それにかんする議論は政府の監視下に置かれる。建設予定地でも、移住 (立ち退き) を命じられることになる住民への説明はほとんどなく、何の情報もないまま「安全神話」が独り歩きしている。日本からベトナムへの原発輸出は、このようななかで、事故の教訓も安全強化の具体策も課題にすらならない状況下で進行しているのだ。

そもそも「原発輸出」とは何か、第 1 章では「①原子力発電の技術および施設・部品を海外に売り出すこと、②海外における原子力発電所の建設事業に日本企業が参入すること、③海外における原発の導入に日本 (企業・政府) が技術提供することなどを指す」と定義されている。つまり、官民一体となって原子力発電に要するすべてを丸ごと輸出する大事業だ。これは、第 2 章に詳述されているとおりに、実は 50 年以上前から多国間で (部分的には) すでに行なわれてきたことであり、日越二国間の単なる技術移転などではない。原子力技術にかんしては、2006 年にアメリカの大手企業ウェスティングハウス・エレクトリックを日本の東芝が買収したように、日本とアメリカは持ちつ持たれつのある関係にある。アメリカでは、1979 年のスリーマ

イル原発事故以来、2001年の政策転換まで原発の新規建設が行なわれてこなかったため、この分野では後発の日本企業がアメリカの原子力産業を側面から支える格好になっている。ところが、日本では福島事故以降新規建設が難しくなった。そこで外国に活路を見出すべく、日本政府は2011年から13年にかけてベトナムを含む7ヵ国と原子力協定を結び、さらに8ヵ国と交渉中である。こうした舞台裏の事情は、社会（＝国内）問題として原発の是非を論じる通常多くの著書ではみえにくい事柄であり、原子力発電の非民主的な性格が改めてよくわかる。なかには、輸出にかかわる各種調査が公正に行なわれたか、調査に使われた費用は本当に必要だったのか、といった一般にはわかりにくい問題も含まれる。事実、ニントゥアン第二原子力発電所にかんして日本原電が経済産業省の補助金と委託契約により実施した実現可能性調査では、総額28億5千万円もの調査費の使途の結果が長期にわたって開示されず、関連文書がようやく開示された際にも、開示されたのは28億5千万円中の5億円分のみ。しかもこれは、実は東日本大震災復興予算の流用であり、その報告書は大半が黒く塗りつぶされていた。本書にも掲載されている黒塗りの文書の画像は衝撃的であり、象徴的でもある（p. 41）。

日本では、福島事故の影響が非常に大きいため、原発関連の報道は比較的注目されやすく、ニントゥアンの建設予定地の現状報告や取材記事が何度か公表されてきた。本書にコラムを寄せているビデオ・ジャーナリスト

の中井信介は、事故後早い時期に現地を訪れたひとりで、自ら見聞きしたことを「忍び寄る原発一福島の苦悩をベトナムに輸出するの か」と題して映像化している。しかし、原発という非常に大きな問題群に直面したままだと、問題の構造がよく似た他の問題の存在を見落としかねない。その点で第4章の中野論文は、ベトナムにおける資源・エネルギー問題という大きな視点から、中南部の海岸地帯における原発の建設計画を視野に入れたうえで、同じ中南部の高原地帯におけるボーキサイトの開発計画の実態を明らかにした得がたい論考である。後者については、国会の審議を通さずに決まったこと、入札過程が不透明であること（実際には中国の企業が落札している）、特に周辺の自然環境への悪影響が予想されること、等々、問題点は少なくないが、なかでも深刻なのは、開発対象地域がいくつかの少数民族の居住地域である問題だ。当該地域はベトナム戦争時の激戦地でもあり、米軍に支援されて旧ベトナム共和国（いわゆる南ベトナム）側について戦った民族もある（p. 112）。今日のベトナムでは複雑な立場に置かれている彼らの土地を、国策として一方的に開発することがどのような意味をもつのか。綿密な研究のうえで2012年2月には政府官僚と現地住民への聞き取り調査を行なった中野は、原発の建設計画に先立って進められたボーキサイト開発計画について、全般に「政府と国有企業による開発戦略の不備、実施過程での管理の杜撰さ」（p. 131）を指摘している。この「杜撰さ」が、後発の計画にかんしてはありえないと言い切れるか

どうか。原発輸出を主題とする本書にこの調査結果が収められていることの意義は大きい。

「このように、日本からベトナムへの原発輸出は単なる機械や技術の輸出にとどまらず、これに社会的に付帯する〈大都市 vs 立地地域〉および〈儲ける企業 vs 被ばく労働者〉の差別構造の輸出にもなる。そして、ベトナムではこれがニントゥアン省に立地することから、〈多数民族 vs 少数民族〉の差別をつくりだす。また、この輸出そのものが、丸ごと〈先進国 vs 途上国〉の差別を体現しているのである」(pp. 186-187) との第 6 章での見解が、ベトナムへの原発輸出にかんする決定的な見解と思われる。そもそも、ベトナムのエネルギー専門家の見方を紹介した『赤旗』2015 年 3 月 17 日付の記事でも指摘されているように、ベトナムでの電力需要は、近年の経済成長の鈍化から今後しばらくは大きく変わることなく、したがって現状に加えて火力発電所の増設によって賄えると思われる。また『日本経済新聞』2015 年 3 月 31 日付の記事によると、主に三井住友銀行など日本の銀行 11 行がベトナムの火力発電事業に約 800 億円の協調融資を決定。これはベトナムの計画投資省の外国投資庁の公式サイトでも発表されているので本決まりなのだろう。

では一体、何のための原発なのか。ベトナムへの原発輸出は、「ベトナムの電力不足を解消するためなどという単純な経済的事情によるものではなく、日米の軍事協力の下、中国包囲をにらんで日本政府が謳い上げる日越〈友好〉の政策の延長上に乗っているき

わめて政治的なものである」(p. 139) との第 6 章の洞察が、問題の根幹を見事に明かしている。たしかに、かつてあれほど激しく過酷な戦争を戦った 2 つの国、ベトナムとアメリカは、ここのところ急速に、中国の海洋進出に対応するための協力体制を築きつつある。たとえば、アメリカの国家核安全保障局が、非機密扱いの原子力技術および関連支援の輸出管理規制にかかわる連邦規則について、輸出対象国のリストに新たにベトナムを加える改正を行なっている(ベトナム総合情報サイト「ベトジョー」2015 年 3 月 9 日付の記事)。これにより、両国の原子力分野での交流が活発になると予想される。日本での原子力発電のあり方と同じように、ベトナムでも、問題はエネルギー問題である以上に軍事問題ではないのか。すなわち、核兵器開発を見越した中長期的な環境整備が本当の目的だろう。

この圧倒的な現実にもかかわらず、私たちの努力は事実を知ることから始まる。潜在する危険をも顧みず、事実の積み重ねによって真実に到達しようと、強靱な意志を平明な文章に注ぎこんだ本書の執筆者たちに敬意を表したい。友好の促進が生命の軽視に転じるなら、欺瞞でなくて何であろう。ベトナムに対しては、機会があれば本書の知見を無理なく伝え、広め、日本では、自分たちの諸問題の解決・改善のために粘り強く取り組んでゆく。友人は大切にしなければならない。

森下明子.『天然資源をめぐる政治と暴力—現代インドネシアの地方政治』京都大学学術出版会, 2015年, 250 p.

見市 建*

本書は前後して出版された本名 [2013], 岡本 [2015] に並ぶ「仁義なきインドネシア」三部作, その「カリマンタン死闘篇」というべき一冊である。30年あまりのスハルト権威主義体制を経て, 1998年に民主化と地方分権化が進められたインドネシアの国際的評価は高い。しかしその背後には官民の暴力装置が跋扈している, これが「仁義なき」シリーズの通奏低音である。

本書の舞台であるカリマンタンの三州のうち, 西・中カリマンタン州(以下西・中カリ)では1990年代末から2000年代初頭に, 数ヶ月で500~1,000人ほどの犠牲者と数万人の避難民を生む民族紛争が発生し, 他方の東カリマンタン州(東カリ)では暴力的紛争に至らなかった。なぜ三州ではこうした違いが生まれたのか, 民族紛争はなぜ長期化しなかったのか, これが本書の問いである。説明変数は政治・経済構造の差異である。ここでいう政治構造とは, 地方自治体レベル(州・県・市)の権力者の経歴や人脈, 中央との関係, 政治的競争のパターンであり, とくに民主化以降の地方首長選挙を分析の対象とする。他方, いずれも豊かな天然資源を有する三州における経済構造は, 天然資源の種類, 担い手, 利権の受益者とそのアクセスの方法

等によって規定される。

本書の構成は以下のとおりである。第1章「暴力・天然資源・地方政治」では, 先行研究を踏まえて本書の位置づけを明らかにしている。第一義的には, 本書は資源産出地域における暴力的紛争の事例研究である。先行研究では, 暴力的紛争の発生と長期化の条件として, ①天然資源の開発利益が私的セクターに分配されていない, ②紛争発生地域と天然資源との距離が近い場合, が挙げられている。しかしこれらはインドネシアには当てはまらない。政府が一元的に石油・天然ガスを管理していたアチェ州では分離独立運動が起きた一方で, 東カリは平穏であった。また中カリの紛争は金鉱近くで始まったが, 数ヶ月で収束した。著者はそこで, ①政治行政ポストの分配の有無, ②紛争当事者が天然資源を資金源にできるか否か, という新たな条件を提示している。インドネシア政治研究としては, 民主化後の諸研究を踏まえ, なぜ政治的手段として暴力が用いられる地方とそうでない地方があるのかが説明されていないという。そして地方ごとに異なる天然資源をめぐる利権構造が, 政治構造の違いをもたらしているという仮説が提示される。

第2章「カリマンタンの民族紛争」によれば, 西・中カリの民族紛争の内実は, 行政ポストに恵まれないダヤック人地方エリート層による示威行為であった。その暴力の矛先はポストを握る権力者ではなく, 下層の労働市場で競合する移民のマドゥラ人に向けられた。他方, 紛争当事者たちには天然資源から得られる莫大な資金へのアクセスはなく, 紛

* 岩手県立大学総合政策学部

争は継続しなかった。紛争後ダヤック人は行政ポストを獲得するようになり、政治的利益集団としての民族の役割は低下した。

ではカリマンタン三州の政治・経済構造にはいかなる差異があるのか。第3章「スハルト時代における権力と資源の分配」は大統領を頂点とするパトロン・クライアント・ネットワークが、三州ではいかに構築されたのかを説明する。東カリでは、地方首長ポストは与党ゴルカルと国軍の後ろ盾があれば、民族等の出自に関係なく分配された。中・西カリでは、スカルノ前政権で重用されたダヤック人が次第に周縁化され、地方首長の大半はマレー人やジャワ人になった。民主化・地方分権化以降は、東カリでは中央との結びつきが強いスハルト時代の州政治エリートや国軍出身者が、中カリでは県政のトップ・エリートや地方実業家が、西カリではより低い役職にあった元官僚や主要産業以外の実業家が地方首長に当選するようになった（第4章「民主化・地方分権化後の地方首長の変化」）。

第5から7章はこうした違いを生んだ政治構造と経済構造の結びつきの詳細が順に明らかにされる。東カリ（第5章副題「中央政治に翻弄される州政治エリートたち」）では、スハルト体制期において主要資源である石油・天然ガスの利権は地方に分配されず、大物実業家は育たなかった。民主化後は、資源開発利権を管理する中央政財界との太いパイプを活かした旧来の州レベルの政治エリートが当選した。彼らは中央の権力闘争の影響を受けやすい。政変直後の1998年6月に州

知事になった元軍人のスワルナは2003年に再選されたが、翌年のユドヨノ政権成立によって影響力を失っていった。クタイ・カルタヌガラ県知事のシャウカニと対立、最終的にスワルナが汚職容疑で逮捕された。しかしシャウカニもまた、庇護者のカラ副大統領とユドヨノ大統領が不和になると、汚職容疑で逮捕された。直接選挙制導入（2005年）後の2008年に州知事に選ばれたのはユドヨノの民主主義者党公認候補アワン・ファルク・イシャ（2013年再選）であった。この地方の勝負を決めるのは「頂上」（中央）の権力闘争であり、暴力は有効な政治的手段にならない。

中カリ（第6章「地元実業家の政治的台頭」）においては、スハルト時代に木材ビジネスの下請けで富を蓄えた地元業者が、2000年代に石炭やアブラヤシ事業にも進出、州の広範囲にビジネスを展開する大物実業家に成長した。地方分権化によって地方政府に許認可権が与えられたため、実業家たちはさらなる利権を求めて各地で地方首長を擁立した。他方で分配に与ることのできないダヤック人のエリートたちは、暴力的手段に訴えて「おこぼれ」を得ようと民族紛争を起こした。しかし暴力による影響力拡大は限定的だった。2005年州知事選で当選したテラス・ナランはダヤック人であったが、有力者家族の出身で、地元実業家の協力を得た他、政党のマシンなどさまざまなネットワークを利用してダヤック人以外からも幅広い支持を獲得した。

西カリ（第7章「群雄割拠する中小規模

の地方有力者たち)では、中カリと対照的に、地元業者が資本を蓄積することができなかった。木材資源がもたらす莫大な利益は、国境を接するマレーシアの業者が吸い上げていた。県レベルで影響力をもったのは中小の企業経営者や伐採キャンプの労働者ボス、民族組織の幹部などであった。資金調達力には大きな差異がないために、ときに暴力も有効な政治的手段となった。スハルト時代には県の郡長に過ぎなかったコーネリスは、1999年の県知事選直前の議事堂焼き討ち事件を契機に台頭、2001年には新設県ランダックの知事に選ばれた。ダヤック人意識に呼びかけて2008年の州知事選で当選すると、アブラヤシ開発の許認可権を握った(2012年再選)。¹⁾まさに「成り上がり」である。

終章では、天然資源の存在が暴力的紛争に結びつく条件を考察している。暴力の使用は十分な資金力がない地方政治エリートが、首長選挙に出馬した場合や僅差で敗北した場合に多い。直接選挙制の導入は、政治資金以外にも、州内にまたがるネットワークの重要性を高め、特定民族の利益拡大を目的とする暴力は効果的な政治的手段ではなくなりつつある。また自治体新設によって政治行政ポストがより広範に分配され、競争は同一民族内で行なわれるようになった。民族間の暴力的紛争が再発する可能性は低い。

以下、本書の意義と課題について、主としてインドネシア政治研究者である評者の立場

から、いくつか見解を述べておきたい。まず、1998年以降重要性を増した地方の政治、とくに凄惨な民族紛争が起きた中・西カリについて、国内外の比較の視点を持ち込んで分析を行なった本書の意義は明らかである。論旨は明快であり、また扱いが難しい「民族」(センサス上の区分である suku)とその下位カテゴリーとの関係を政治的利益集団としての機能に絞って鮮やかに捌いている。また第5章以降は表現こそ抑制的だが、地方権力者の台頭過程が生々しく伝わってくる。

課題も指摘しておきたい。まず天然資源をめぐる暴力の研究としての位置づけは本書の視野を狭めてしまったように思える。西・中カリの「民族紛争の特殊性を一言でいうならば、天然資源が(誘因としても長期化の要因としても)関係していない暴力的な紛争であった」(p. 60)とすると、果たして天然資源と紛争についての先行研究への批判として本書のケースが適切だったろうか。

もっともこの点は、インドネシアの地方政治研究においては、本書の事例分析がむしろ高い汎用性をもつことを示している。本書の「民主化・地方分権化による政治的競争パターンの変化の中で、なぜ暴力が政治的手段となったのか」(p. 28)という問いは極めて重要である。しかしそうすると、アチェ州よりも、西・中カリと同時期に起こったボソやアンボンの宗教紛争が比較の対象となるべきだろう。無論、著者は先行研究でそうした比較が行なわれてきたことは十分承知であろうが、本書を対置してその意義を示して欲しかった。また、本書の主眼となった第5章

1) p. 197に記載されている選挙資金8兆5,210億ルピアは85億2,100万ルピアの間違いだと思われる。

以降は「紛争後」の政治であり、暴力が使用される場面はほとんど登場しない。同じく民主化後の政治・経済構造と地方首長選挙に着目し、地方における寡頭制支配の形成を指摘する Hadiz [2010] などの議論にも十分対抗しうる内容を本書は備えている。

では、暴力のあとのインドネシア地方政治には何が来るのか。本書は資本（カネ）の他に、州にまたがる広範なネットワークの重要性を指摘している。近年のカリマンタン政治はさらなるヒントを与えてくれる。前述のシャウカニ失脚から3年後の2010年、娘のリタ・ウィドヤサリが弱冠36歳で同じクタイ・カルタヌガラ県知事に当選した。彼女は「反汚職」を掲げ、「全国最優秀県知事賞」を受賞するなど、悪名高い父親とは対照的な政治家像の形成に成功しているようである。西カリのカプアス・フル県知事選後の暴動 (p. 199) の首謀者と指摘されたアキル・モフタルは、その後憲法裁判所長官まで登り詰めたが、2013年に中カリを含む複数の地方首長選をめぐる汚職で逮捕され、終身刑を言い渡されている。この事件の余波は中央政界も揺るがしている。鍵となっているのは政治的手段としての「反汚職」である。直接選挙の導入とSNSなどを含む新旧メディアが地方まで浸透しつつある条件におけるエリート間の競争の激化は、汚職の取締りが恣意的に運用されるような政治を継続させる一方で、各地で改革派の首長を誕生させ、ときに市民社会の要求実現を可能にしている。さて、シャウカニの娘は、あるいは「成り上がり」コーネリスの後任はどうなるのだろうか。早

くからカリマンタンの政治に目をつけていた著者による続編に期待したいところである。

引用文献

- Hadiz, Vedi. 2010. *Localising Power in Post-Authoritarian Indonesia: A Southeast Asian Perspective*. Stanford: Stanford University Press.
- 本名 純. 2013. 『民主化のパラドックス—インドネシアにみるアジア政治の深層』岩波書店.
- 岡本正明. 2015. 『暴力と適応の政治学—インドネシア民主化と地方政治の安定』京都大学学術出版会.

杉島敬志編. 『複ゲーム状況の人類学—東南アジアにおける構想と実践』風響社, 2014年, 382p.

山口亮太*

本書は、杉島が提唱する「複ゲーム状況」について、東南アジア各地のフィールドの事例から検討と分析を行なうものであり、本書の執筆者たちによって2009年度から2011年度にかけて行なわれた共同研究の成果である。

本書のキータームとなる「複ゲーム状況」については、杉島 [2008] に詳しい。複ゲーム状況とは、「両立しえない規則／信念が同時並行的に作用する事態」[杉島 2008: 2] である。近年の人類学では、無時間的な社会構造や体系的統合体としての文化や社会を描いてきた反省から、混交や変化が中心的

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

なテーマとして注目されてきた。しかし、混交には、料理のように混交が行なわれていることが意識されることもないような「通常混交」や、穢れとも関係が深い、別種の分離しておくべきものがミックスされている「分類混交」と、杉島が複ゲーム状況と呼ぶものの、少なくとも3種類の事態が混同して議論されてきたという [杉島 2008: 15]。さらに杉島は、たとえ混交や変化が注目されたとしても、「体系」のイメージをとまなう複合体としての社会や文化の概念は保存されていると指摘する [杉島 2008: 15]。

フィールドでみられる、複雑に絡まり合い、しばしば相矛盾する人びとのさまざまな行為や言説を、文化や社会といった統合的全体に還元せず、かといって全てをポストモダンの構築物として断片に分解しつくすことも拒否するならば、人びとの生活をどのように提示し、分析を行ないうるのか。本書が目指すのは、このような人類学的な対象理解の刷新である。

本書はそれぞれ複ゲーム状況論の根幹をなすタームを冠した3部からなり、その構成は以下のとおりである。

序論 複ゲーム状況への着目一次世代人類学
にむけて (杉島敬志)

第一部 不定見者

第一章 フィリピンの都市移住者コミュニティでみられる複ゲーム状況 (細田尚美)

第二章 北部タイ農村地域における医療をめぐる複ゲーム状況 (飯田淳子)

第三章 バリにおける慣習村組織の変化とその非全体論的解釈 (中村潔)

第二部 カプセル化

第四章 ゲーム間を開拓する—フィリピン地方都市、呪術・宗教・医療の複ゲーム状況から (東賢太郎)

第五章 ピーの信仰をめぐる複ゲーム状況論 (津村文彦)

第六章 マレーシア・イスラームにおけるハラール実践—複ゲーム状況という視点から (多和田裕司)

第三部 ゲーム外状況

第七章 複ゲームとシンクレティズム—東南アジア山地民ラフの宗教史から (片岡樹)

第八章 土地をめぐる複ゲーム状況—台湾・ブヌン社会の事例から (石垣直)

第九章 グローバル化するエンジニアリングの複ゲーム状況と人類学 (森田敦郎)

第十章 東インドネシアにおける狡知と暴力を理解するための複ゲーム状況論 (杉島敬志)

次に内容を概観する。

第一部「不定見者」では、「両立しえない規則／信念をともに受け入れるが、択一的に奉じることのない多数者」 [杉島 2008: 4] である不定見者に注目した3本の論文が収録されている。

第一章の細田論文では、フィリピンのマニラ市を舞台に、親族間の「助け合い」を規範

とする富の分配（相互扶助）と自助努力をめぐる複ゲーム状況が描かれる。都市に住む成功者は相互扶助に基づいて親族を助ける一方で、経済的な依存関係の成立を注意深く避け、自助努力の大切さを説くという、複ゲームを状況ごとに使い分けている。直接その利益をうけない多数の村人たちは、不定見者として、成功者による富の分配が妥当かどうかを判断し、彼らへの態度を変化させる。

第二章の飯田は、混交や変化に着目する近年の医療人類学においても、体系や複合体としての文化のイメージは維持されていると指摘する。北タイの農村と病院における健康や病をめぐる事例からは、むしろ、伝統的／近代的医療従事者らがもつ、出自の異なる規則 - 信念の対立が浮かび上がり、それらは並存しているが統合されることはないことが示される。そして、病の当事者たちや医療従事者たちでさえ、それぞれの信念を択一して抱懐することのない不定見者として振る舞うこととなる。

第三章の中村論文では、インドネシアにおける地方分権化の流れを軸に、バリ島東部の慣習村における組織改編と、一般村民や高学歴の村外居住者が慣習村運営に参加していく中で起こる、都市で教育を受けた「近代派」と「伝統派」の「慣習」をめぐるせめぎ合いに焦点が当てられる。両派の対立は解消しえないかのようにみえるが、実際にはどちらも伝統や近代を択一的に奉じることのない不定見者として状況に参加していることが示される。

第二部「カプセル化」では、「両立しえな

い規則／信念の一方による他方の被覆」[杉島 2008: 9-10] とされるカプセル化に着目した 3 本の論文が収録されている。

第四章の東論文は、フィリピン地方都市における医療・宗教・呪術の並存状況に注目する。呪医は、多数派であるカトリックからは異端視され、近代医療からは偽医者との烙印を押されるが、敬虔な信者であり医療における正統な知識をもつことを主張し、それら権威に積極的に被覆されることによって当座の活動を可能としている。このような、弱者によって維持されるカプセル化は「いわゆる『抵抗』とは異なった形での弱者の生存戦略の一形態」(p. 167) であると主張する。

第五章の津村論文は、タイの精霊信仰と仏教を取り扱う。仏教と精霊信仰にまつわる諸々の規則 - 信念群は往々にして葛藤状況を生じるが、それによる危機的状況を回避するための新たな規則 - 信念の創造が権威者によってなされる。これを津村は「媒介項の挿入」と呼び、これによって、互いに相容れない規則 - 信念群の状況に応じた運用が可能となり、仏教 - 精霊信仰の複ゲーム状況は破綻することなく維持されてきたと指摘する。

第六章の多和田は、マレーシアにおいて産業化が推進されるイスラームのハラール実践に着目する。マレーシアの食品・飲料産業に参加する企業の 7 割を非ムスリムが占めるが、人口の 6 割以上を占めるムスリム系住民を顧客として獲得するためには、政府の定めるハラール認証制度に通る必要がある。このため、イスラームとは異なるゲームを行なう非ムスリムが、マレーシアのイスラーム化

を加速させるという逆説的な状態が発生している。

第三部「ゲーム外状況」では、「複ゲーム状況を取りまき、そこに出自や経緯の異なる規則 - 信念を登場させる背景的な諸事態」(p. 11)であるゲーム外状況に注目した4本の論文が収録されている。

第七章において片岡は、宗教現象やポストモダン的な文化一般を対象としたシンクレティズム論では、複数の宗教的伝統の競合・緊張関係を主題化することはできないと指摘する。タイの山地民ラフにおける、至高神と精霊をめぐるせめぎ合いと、キリスト教諸派の宣教による在来宗教のカプセル化の諸展開に着目し、リーチの「儀礼の文法」論と対比させつつ、そこから抜け落ちているさまざまな歴史的動態を議論の射程におく複ゲーム状況論の可能性を示唆する。

第八章の石垣論文では、台湾のブヌン人による土地と狩猟権に関わる諸実践が、日本軍による植民地化と強制移住、皇民化政策をへて、戦後のキリスト教化と権利回復運動の時代に至るまでに、どのように変化してきたかが論じられている。その中で、石垣は、従来の単線的な歴史理解を批判し、さまざまな要素が混じり合いながら社会が変化していく累積的歴史観に基づいた記述のための複ゲーム状況論の有効性を論ずる。

第九章の森田論文は、タイにおける日本人技術者と現地の技術者のあいだの技術移転を題材としているものの、その二者関係に人類学者である森田自身も含め、複ゲーム的な状況を自らも増殖させながらそれに寄生的に学

知の生産を行なうという、人類学そのもののあり方を問う。グローバル化の進展とともに還元主義的な傾向をみせる現代社会において、異なる実践が緊張をはらみながら並存せざるをえないことに人類学者は意識的であるべきだと森田は説く。

第十章の杉島論文は、東インドネシア、フローレス諸島の歴史と民族動態を取り上げる。祖先や与妻者などが子孫や受妻者などの栄枯盛衰を決定するという「因果秩序」と、狡知と暴力による先住者の支配を確立しようとする「実力主義」の複ゲームは、奴隷交易というゲーム外状況と相まって、諸王国・首長国の興亡や合従連衡を引き起こしてきた。杉島は、このような東インドネシアの歴史を、従来の研究で依拠されてきた「序列」の概念で論ずることができなとし、因果秩序と実力主義の分布とその比較を行なう、新しい歴史研究の可能性を提示する。

以上、複ゲーム状況として本書で分析の対象となった事例は多岐にわたる。その中でも、複ゲーム状況論の有効性がよくあらわれているのは、カプセル化を論じた諸論文であるだろう。両立しない規則 - 信念の遭遇の結果を描いたこれらの事例は、本書に通底する、混交やシンクレティズムへの疑義と、複合体としての文化や社会のイメージへの有効な批判となっている。その極北は、人びとが全く異なる規則 - 信念に基づいて行動しながらも、事態は支障なく進展するというケースである。片岡が論ずる、キリスト教の布教の際に発生した、布教する側とされる側の双方が、相手の活動を自らの枠組みで理解したと

いう「幸せな誤解」がそれである (pp. 252-257)。この事例は、従来であればキリスト教の土着化という視点で分析され、双方の「ズレ」そのものは対象化されなかったに違いない。

一方で、不定見者の扱いには難しさがつきまとう。そもそも、われわれの生活には無数の規則 - 信念があふれており、われわれがその全てに定見をもつことはありえず、その必要もない。また、本書の各論が示すように、専門家や権威者でさえ、不定見者として振る舞うことがありうる。ならば、ある人物がある瞬間に何らかの定見をもっているかのようにみえるのは、そのときにその人物がおかれた立場や人間関係、文脈、その場における相対的な知識の過多などに起因するのだ。このような個別・具体的な瞬間において、ある規則 - 信念群は両立しえないものとして立ち現れてくるのではないか。杉島があげる、大学教育におけるカネ派と時間派の対立 (pp. 10-11) も、実は必然的なものではない。カネは大事であるし、時間も大事なのだ。しかし、大学を取り巻くゲーム外状況の変化と、教員たちが行なうコミュニケーションによって、それらはあたかも両立しえないかのように配置されてしまう。本書で取り上げられたのは、すでに固定化された複ゲーム状況が主であったが、相反することが自明ではない規則 - 信念群が複ゲーム状況として定位されているケースもありえるだろう。今後、複ゲーム状況が生起する場面におけるコミュニケーションにより踏み込んだ分析が行なわれることを期待したい。統合的全体としての文化や社会

のイメージを批判し、混交やシンクレティズムについての議論を精緻化・相対化する複ゲーム状況論は、人類学を志す全てのものにとって必読であるだろう。

引用文献

杉島敬志. 2008. 「複ゲーム状況について—人類学のひとつの可能な方途を考える」『社会人類学年報』34: 1-23.

Ferdinando Sardella. *Modern Hindu Personalism: The History, Life, and Thought of Bhaktisiddhānta Sarasvatī*. New York: Oxford University Press, 2013, xiii+342 p.

間 永次郎*

19-20世紀転換期のベンガル社会で興隆した近代ヒンドゥー教運動は、しばしば「ネオ・ヴェーダーンタ」のアドヴァイタ思想によって代表されてきた。このことは、ヴィヴェーカーナンダやオーロピンドなどのベンガル出身の著名な宗教家たちの思想が、後世に及ぼしたグローバルな影響を考慮しても、自然な成り行きであったといえるかもしれない。しかしながら、インドの独立後、60年代に入るまで、国内外でほとんど忘却されてきたひとりのベンガル人宗教家が説いた独特の神学的人格主義 (personalism) が20世紀後半以降、西洋人を取り込んだ世界最大規模のヒンドゥー教組織のひとつである「ク

* 一橋大学大学院社会学研究科

リシュナ意識国際協会 (International Society for Krishna Consciousness, ISKCON)」によって復興したことを知る時、一枚岩では語れない複雑な近代ベンガル社会における宗教事情の再認識を迫られる。

フェルディナンド・サルデツラ氏が、スウェーデンのゴッテンブルク大学に提出した博士論文をもとに出版された本書は、ISKCON 創設者の A・C・バクティヴェーダーンタの師であるスワミー・バクティシッダーンタ・サラスワティー (1874-1937; 以下、バクティシッダーンタ) の思想と運動の実相を、大量の一次史料を用いて、一冊の著作として包括的に提示した初めての研究書である。バクティシッダーンタは、世紀転換期のボッドロロク¹⁾ 層 (*bhadralok*; ベンガル人郷紳層) にあっては少数派に属するガウディヤ・ヴァイシュナヴァ派の指導者であった。本書では、バクティシッダーンタのチャイタニヤ・バクティ思想が、イギリス植民地主義とベンガルの近代化の中で、いかに彫琢され、布教されたか、また、その思想は同時代における他の近代ヒンドゥー教思想家との関係でいかに位置付けられるか、が探究される。本書は、序章を含む、全六章で構成される。また、付録 (A, D, E) にも、本書の議論を補完する専門用語の説明や先行研究の概要などについて、充実した内容が書かれて

ある。以下では、本書の序章と付録を除く、各章の内容を概観したうえで、評者による些少の論評を行なうことにしたい。

第一章では、バクティシッダーンタが活動した植民地期ベンガルのボッドロロク層でアドヴァイタ思想がいかなる経緯で、ヒンドゥー教を代表する思想とみなされるようになったかが論じられる。18世紀から19世紀後半まで、概してボッドロロクはイギリス統治・文化に肯定的であった。しかしながら、19世紀後半以降、ボッドロロクは、それらの正当性に疑問をもち始め、西洋文化に対するインドの「伝統」の中からベンガル社会の「近代化」を推進するようになった。そして、「ヒンドゥー教 (Hinduism)」は、偶像崇拝的で、性的に不道徳であるとする植民地主義の批判的言説に抵抗する中で、ボッドロロクは、合理的で一元論的なアドヴァイタ思想こそがヒンドゥー教の中核を示すものであると主張するようになった。合理的・普遍的・平等主義的なアドヴァイタ思想こそが真性なヒンドゥー教であることが強調されるに伴い、人格神崇拝を行なうヴァイシュナヴァ派は、偶像的・退行的・閉鎖的であるとみなされていった。しかしながら、バクティシッダーンタが培っていったガウディヤ・ヴァイシュナヴァ派の思想は、このような宗教的二項対立に収まり切らない独特の伝統 (*sampradāya*) 概念を含むものであったとされる。

第二章では、バクティシッダーンタの宗教思想形成と、国内の布教活動について論じられる。彼の初期思想形成 (1874-1900) において最も大きな影響を与えたのが、父のバク

1) 本書の中では文脈に応じて、ベンガル語表記、デーヴァナーガリー表記、英語表記という3つ言語表記が使用されている。本書評では便宜的に、「ボッドロロク」という言葉を除いて、固有名詞については一貫して、デーヴァナーガリー表記に従うことにした。

ティヴィノーダと、ガウラ・キショーラというヴァイシュナヴァ派のサードウであった。父は、チャイタニヤ思想に精通した著名な宗教哲学者・活動家であり、バクティシッターンタは、生涯を通して、この父が書いた著作と実践から影響を受けることとなった。また、厳格な禁欲生活を送るガウラ・キショーラとの出会いは、バクティシッターンタに宗教的形式主義を越えた「真の霊的生活」を知らしめたという。バクティシッターンタは、サンスクリット・カレッジで給料の良い教師の職が保証されていたが、1901年に、ガウラ・キショーラによって、ガウディヤ・ヴァイシュナヴァ派の入信の儀式を受け、ボッドロクロクとしての特権を放棄した。そして、1914年に父が死去し、翌年15年にガウラ・キショーラも死去したことをきっかけに、バクティシッターンタは、サンニャーシーとなり、本格的な布教活動を開始する。彼の活動は拡大していき、1930年代には、国内最大のチャイタニヤ・バクティ運動となった。しかしながら、1937年に彼が没した後、師弟継承をめぐる、組織内部の分裂が起こり、その運動は俄に衰退していった。

第三章では、1930年代に行なわれたヨーロッパ宣教について論じられる。1933年4月に、バクティシッターンタは、物質主義が跋扈したヨーロッパにチャイタニヤの霊的メッセージを伝搬するという使命感の下に、3人の弟子を、イギリスに派遣する。ロンドンにおいて弟子たちは、多くの著名な政治家や学者の支持を勝ち取った。しかしながら、肉食主義や性交渉の抑制といった厳しい

自己規律が要請されるバクティシッターンタの思想は時に、イギリス人には受け入れ難いものであった。弟子たちは、エリート層と幅広く交流することに成功したが、その思想を大衆レベルで根付かせることはできなかった。1933年12月に、弟子たちは、ロンドンからドイツに向かった。弟子たちは、ドイツでも各地で講演活動を行ない、著名なサンスクリット学者・キリスト教神学者・宗教哲学者と対談した。しかしながら、徐々にナチズムの高まりによって、弟子たちの講演は抵抗を受けるようになり、1935年には国外に脱出を余儀なくされた。ドイツでは、アーリヤ人としてのインド人に対するオリエンタリスティックな敬意も相まって、バクティシッターンタの思想は広く受け入れられたが、最終的にナチズムの妨害により壊滅の結果を迎えた。バクティシッターンタの期待に反して、その運動は30年代のヨーロッパ社会において、大きな大衆運動へと発展することはなかった。

第四章においては、バクティシッターンタのチャイタニヤ・バクティ思想における最大の特徴とされる「人格主義哲学 (personalist philosophy)」が吟味される。バクティシッターンタは自著において、究極的実在と矛盾しない非物理 (*aprakṛti*) 的なレベルの人格性があることを指摘し、古典インド哲学にみられる一元論的非人格主義を批判する。そして、アドヴァイタ哲学が依拠している「サグナ (*saguna*; with attributes)」と「ニルグナ (*nirguna*; without attributes)」の二元論に基礎付けられた哲学的基盤が、「自

然／物質 (*prakṛti*)」の様相である「グナ (*guṇa*)」を越えたところにある「バガヴァーン (*bhagavān*)」という形而上学的な「至高の神的人格性 (Supreme Personality of Godhead)」を捉え切れないと論じる。この問題を解決するために、彼は、マドヴァヤラーマヌジャの思想に依拠しながら、「サヴィシエシャ (*saviśeṣa; with particularity*)」と「ニルヴィシエシャ (*nirviśeṣa; without particularity*)」という用語によって自らのガウディヤ・ヴァイシュナヴァ派の宗教思想を分節化する。バクティシッターンタのバガヴァーン概念は、物理的属性に拘束されないニルグナな概念であると同時に、形而上学的個別性を有したサヴィシエシャな概念なのであった。彼は、こうした神的人格性にアプローチするための方法が、主知主義的探求や隠遁的瞑想ではなく、神の名を頌栄するバクティの実践にあるとした。この時のバクタの愛は、世俗的セクシュアリティを越えたクリシュナとラーダーの神的情念に倣うものとされた。

第五章では、バクティシッターンタの思想の意義が、同時代のベンガルにおける社会的・宗教的文脈の中で位置付けられる。最初に、バクティシッターンタの思想を文脈化するに際して、伝統をめぐる「改革」と「復興」という従来のカテゴリー理解が問い直され、それらが植民地期においては、相互排他的なものではなかったことが論じられる。著者は、バクティシッターンタの宗教思想が、改革とも復興ともつかない両義性を有していたことを指摘する。そして、エリザベス・デ

ミチェリスの理論を援用しながら、その思想が、ヴィヴェーカナンダに代表される「ネオ・ヒンドゥー教」とも、「前近代的伝統主義」とも異なる「近代ヒンドゥー伝統主義」という立場に位置付けられるものであったと主張する。

第五章の最終箇所では、バクティシッターンタの没後、60年代に急速に拡大した、弟子のバクティヴェーダーンタが設立したISKCON運動について言及される。著者曰く、バクティシッターンタよりも明瞭な近代批判と「インド的」な要素を前面に出したバクティヴェーダーンタのオリエンタリズムが、ISKCONのカウンターカルチャー出身の西洋人の感受性によく合致したという。ISKCONについての考察がなされた後、本章では、バクティシッターンタの研究についての今後の課題が提示される。主として、前植民地的ヴァイシュナヴァ派についてのさらなる詳細な検討、また、バクティシッターンタの人格主義思想と、同時期に西洋で興隆した人格主義哲学との比較の必要性などが挙げられている。

以上が、本書の主要な内容である。本書の最大の特徴は、これまでしばしばなされてきたISKCON関係者による聖人伝の記述や、先行研究の断片的記述を越えて、バクティシッターンタの生涯・思想・国内外に及ぶ宗教活動とその影響を、同時代のポッドロク層と、イギリス植民地主義との関係から歴史的・社会的・社会的観点を交えて包括的に提示したことである（先行研究と方法論についての詳細は、付録Aも参照）。加えて、本書では

先行研究で未使用のベンガル語と英語の一次史料が豊富に使用されている(付録 E 参照)。これまで知られていなかったバクティシッターンタ自身の思想(形成)と活動の多くに光を当てた本書の意義は疑い得ないが、同時に、評者は以下の 2 つの点に、若干の疑問も抱いた。

第一に、著者によるバクティシッターンタの「伝統」理解に対する本質主義的な態度である。本書では繰り返し、バクティシッターンタのチャイタニヤ・バクティにおける平等主義や普遍主義などの発想が、植民地主義や西洋的価値ではなく、インドの伝統から導出されたものであったことが述べられている(pp. 244-245)。しかしながら、そこで述べられている伝統は、著者が述べるとおり、必ずしもチャイタニヤ学派の経典から直接導き出された訳ではなく、父のバクティヴィノータの思想を媒介して解釈されたものであった。父はインド哲学だけでなく、カント、ヒューム、ショーペンハウワー、スウェーデン・ボルグなどの著作にも精通した宗教哲学者であった(p. 61)。故に、バクティシッターンタが依拠した父の説くチャイタニヤ思想は、西洋哲学の影響も交えた「想像された伝統」であったことは疑い得ない。父が西洋思想の影響下の中で伝統を解釈したならば、その視座は間接的にバクティシッターンタにも共有されていたことになる。著者は、サイードやリチャード・キングを中心としたオリエンタリズム研究に関する慎重な考察を踏まえているにもかかわらず(p. 160, pp. 253-254)、このバクティシッターンタの伝統解釈

に至っては、安易な本質主義的議論を施してしまっているといわざるを得ない。恐らく、この点は、著者自身が今後の課題であると述べた前近代的ヴァイシュナヴァ派とバクティシッターンタの思想との関係を明らかにする作業によって(p. 274)、より鮮明に浮かび上がってくるであろうと思われる。

第二に、本書において、バクティシッターンタの思想の独自性が強調される際に、しばしばその対比として用いられているネオ・ヴェーダーンタ(ネオ・ヒンドゥー教)の宗教家たちの多様で複雑な思想的相違が見落とされてしまっていることである。たとえば、ヴィヴェーカーナンダ、オーロピンド、アーリヤ・サマージ、ガンディーを一括りに「人格主義」に対立する「非二元論者(non-dualists)」として扱うことには無理がある(pp. 231-232, p. 267)。ガンディーだけを例にとっても、少なからぬ研究で示されているとおり、端的にアドヴァイタ主義者として区分することができない。たとえば、J・T・F・ジョーデズが指摘しているように、ガンディーのヒンドゥー教思想は、多くの点で、ニルグナ・バクティの流れを汲む「サント(Sant; 聖賢詩人)たちの思想から影響を受けている[Jordens 1998: 70-71, 254]。「相違」だけを強調するのではなく、他の思想家との「共通点」をも視座に含んだ複層的な分析が行なわれていれば、バクティシッターンタ自身の思想がもつ独自性も、より説得的な形で示されていたのではないだろうか。

とはいえ、本書がベンガルの近代宗教史

に対する「多大な貢献 (significant contribution)」と評するガヴィン・フラッドの言葉に (本書裏面), 評者は疑いを挟み得ない。ベンガル研究者にとどまらず, 宗教史一般に関心をもつ洋の東西を越えた研究者にも, 本書が

広く読まれることを願う次第である。

引 用 文 献

Jordens, J. T. F. 1998. *Gandhi's Religion: A Homespun Shawl*. London: Macmillan Press.